連綿と

やまがた旧家・名家探訪

▶㉗

仏壇仏具店営む長門屋「山口家」㊥

お城の店とショールーム

山形市旅篭町の仏壇仏具店の長門屋2代目・山口長吉は1908（明治41）年に初代・長蔵の長男として生まれた。僧籍を得た後は長栄を名乗る。長栄と15歳の時まで一緒に過ごした、孫で5代目の笹林陽子さん(58)は、「油絵が好きで、自転車で出かけて行って、描いては出展して賞ももらっていた。でも家からは反対されて、結婚した後は商売に力を入れるようになった」と語る。32（昭和7）年に山形在住の洋画家によって発会した山形美術協会には、10人の発起人の一人として長吉が名を連ねている。

第2次世界大戦後、2代目は需要の拡大とともに全国各地へと仕入れに赴き、山形仏壇以外の仏壇の取り扱いも始めるようになる。そのような中で2代目が手がけたのは、店舗の改修であった。従来の店舗を増改築し、城郭を思わせる白亜の新店舗が完成した。「しょっちゅう京都に仕入れに行くようになり、いろいろなものを見るようになった。美術的なものにだんだんと目が肥えてくるので、商売にもそれが生きたのでは」と5代目は推察する。長門屋の新店舗は、テレビコマーシャルを通じて「お城の店」のキャッチフレーズで親しまれるようになった。

5代目の父・浩平は1936（昭和11）年、長栄の長男として生まれた。5代目によると、「絶対的な長男として育てられた。子どもの頃から店番をしながら勉強していた。大学に行きたかったようだが、商売の息子だから必要ないとのことで行けなかった」という。81年に3代目となった。

73年には、道路を挟んだ店舗の向かいに5階建てのショールーム「仏壇館」を開館した。従来は店舗に商品を並べるほかは、真っ暗な蔵の中にござを敷いて在庫の商品を並べており、時々客を入れて裸電球で見てもらうような状況だった。それではもったいないと、向かいにあった土地が売りに出たのを好機として、2代目の下で当時専務だった浩平にショールーム建設の大事業が委ねられた。今では「仏壇墓石館」として本館も合わせて常時100本以上の仏壇が陳列されるようになった。

当時の長門屋の従業員は十数人ほど。5代目は、「夏はとにかく忙しくなるので、夏だけ勤務する人が増えたり、お寺の息子さんが手伝ってくれたりした。高校を卒業した女性が贈答品の包装の仕事をしていて、お店に行くと遊んでもらっていた。社員旅行をしたり、テレビコマーシャルをしていたので、放送局のツアーに参加したりしていた」と往時を懐かしむ。

（小幡圭祐・山形大人文社会科学部准教授）

1973年に店舗向かいに開館した5階建てのショールーム「仏壇館」（長門屋提供）

「お城の店」で親しまれる長門屋。2代目の山口長栄が改修を手がけた＝山形市